

家族の崩壊

厚生労働省は、先頃、昨年夏に発覚した高齢者の所在不明問題を受け、929人分の年金支給を止めたと発表しました。支給を停止した年金額は、2月から8月分で約2億円とのことでした。

昨年は、「行旅死亡人」という言葉が大きく取り上げられました。「行旅死亡人」とは、住所や氏名が分からず、引き取り手のいない死者のことで、最後は無縁仏として葬られます。

年金支給が停止された約千人の人たちの中には「行旅死亡人」として既になくなっていく方も多いのではないかと考えられます。

こうした中、非常に問題なのは、年金の受取人が行方不明、あるいは既に無くなっているにもかかわらず、家族がその年金を受け取り続けて来たということです。

北海道では、不在となっている87歳になる女性の自宅を捜索したところ、約10年前に死亡したと推定される遺体が自宅で見つかりました。しかも、その家の同居家族が、亡くなった女性の年金を受け取っていたと述べています。

如何なる事情があるにせよ、遺体と同居して、死者の年金だけを受け取り続けるという家族の神経は、異常というしかありません。

そこからは、家族の姿が浮かんできません。家族の絆が断ち切られた、殺伐とした風景は、年金の違法受給という以上に深刻な問題を孕んでいます。

見かけ上はいくらモノが溢れ、華やかであっても、人々の心がすさみ、絆を築けない社会が、豊かであるはずはありません。

我が国は、産業構造の変化、都市化の進展に合わせて核家族化、少子化が進んできました。

特に、地方における少子高齢化は凄まじく、地域のコミュニティを維持することも難しくなりつつあり、「限界集落」という言葉が空しく響きます。

高齢者の夫婦2人世帯や、一人暮らし世帯が増えていますが、こうした高齢者が、家族からも切り離され、社会の仕組みからも取り残され孤立していくことは、大きな問題だと思えます。もしも、親と子を繋ぐモノが、親の僅かな年金だけだとしたら、それは余りにも寂しくはありませんか。

家族からも社会からも孤立し、誰にも看取られず死んでいくお年寄りの孤独死が後を絶ちません。しかし、こんな荒涼とした風景にたじろいでいるのは、高齢者ばかりではないのです。親と同居していながらも居場所が見つからず、孤立感を深め、前に進むことができない若者も多くいます。

かつての日本には、貧しいながらも家族が寄り添い、地域の人々が助け合いながら生きていた時代がありました。社会の有り様が時代と共に大きく変わっていくことは致し方ありませんが、家族をはじめ地域の人々との絆が如何に大切なものか、今回の東日本大震災は教えてくれました。

細い糸を沢山東ね、よりあわせて太い綱にするように、一人ひとりの細い絆が、沢山のひとと繋がる中で太い絆になっていく、そんなことができる社会であつたら良いなと思えます。

勿論、そう願望するだけじゃなく、まずは、自ら一步を踏み出す勇気と努力が必要だということも、東日本大震災が教えてくれたことの一つです。

(塾頭 吉田 洋一)